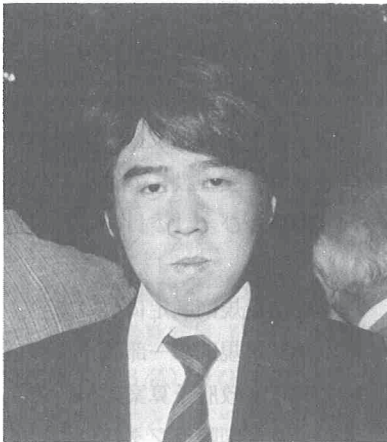


高橋一郎さんを偲んで

田上 多佳子（化学）



高橋一郎技官の突然の訃報に接したのは昭和59年1月3日早朝のことでした。

思えば昨年11月に身体の不調を訴えられ、11月24日に入院されてから41日目のことです。

折からの震の中を御通夜の路に急ぐ途中、生前

のお元気な姿、そして入院前後の様子などが走馬燈のように目の前に浮んで来ました。

入院されてからは教室主任の高橋教授を始め理学部、化学の職員の方、他教室の親しい方々が度々小石川の東大分院へお見舞にゆき、頑張れ、頑張ってくださいと皆で励まして参りました丈に、その御訃報は余りにも空しく中々信じる事が出来ませんでした。

高橋技官は昭和49年5月に化学教室に勤務され、その勤務の傍ら電機大学に通学し昭和55年に卒業しました。教室では電気担当者として教室内の電気設備の保守、管理をつとめておりました。その中でも老朽化した旧館の電気工事には随分苦労したのではないかと思いますし、又、新館の建築に際しても本部及び理学部とのパイプ役となって細かいこと迄配慮して、黙々と仕事を進めておられました。

また水銀廃棄物の回収など、電気係以外の化学教室特有の業務にも携っておられました。

これらの仕事はすべて表に出ない、いわば裏方的なものでしたが、どんな仕事にもイヤな顔一つせず笑顔で引き受けてくれた高橋さんは化学教室の日常業務をとどこおりになく行う上で貴重な存在でありました。

高橋さんはその童顔のためか又呼びやすいお名前のためか教官にも職員にも「一郎さん」と呼ばれ親しまれておりました。

ギターの名手で職員懇親会や送別会では一郎さんのギター伴奏で一段と会が盛り上がり全員大合唱と云う場面もしばしばでした。又、カメラマンとして活躍され、現在アルバムには高橋さんの写した写真が沢山残っております。

29歳の若さは何と伝っても無念の一言につきませんが、高橋さんを知る多くの人々の胸にその温い人柄がいつ迄も生きつづけてゆくことと思います。

最後に教室職員の小さな句会に投句された句を御紹介して、高橋一郎さんの御冥福を心からお祈りしたいと思います。

蟻 螂 の 庭 に 傾 く 網 戸 可 可
水 の 色 静 かに 動 き 秋 の 湖
レ ー ス 編 む 若 き 人 の 手 想 い だ し
御 殿 山 球 追 い つ づ け 油 照 り
池 に 落 つ 夢 物 語 水 扉